



「自伐型林業って、結局どういう林業なの？」

「令和の米騒動」と呼ばれる状況は、決して突然起きたものではありません。長年、農業を「安く支えられるもの」、時にはボランティアに近い労働として成り立たせてきた結果が、いま表面化しているとも言えます。

実は、森の分野でも同じ構造が続いてきました。森林活動は善意や奉仕として語られることが多く、仕事として成り立ちにくい領域とされてきたのです。そんな中で注目されているのが自伐型林業です。

自伐型林業は、地域に暮らす個人が自ら山を管理し、間伐を中心に少しずつ木を使いながら、長期的に森を育てていく林業です。特に里山よりも奥にある山間部で、暮らしと結びついた「ナリワイ」として成り立つ点が特徴です。

私は、この自伐型林業の仕組みを仲間と共に

つくり、自治体と連携しながら各地で定着させる活動をしてきました。記事を書いたり、映像をつくったりしながら、その意義や現場の声を伝える広報役としても関わってきました。

「自伐型林業って、結局どういう林業なの？」そんな問いを何度も受けてきたことをきっかけに、仲間とともに執筆したのが『自伐型林業—小さな林業の今とこれから—』（世界書院）です。

自伐型林業の考え方や背景を整理するとともに、各地で実践する若手たちの座談会、さらに林業の「先進地」とされるドイツ・オーストリアの訪問記も収録しました。

概念だけでなく、現場の声や揺らぎも含めて伝える一冊です。ぜひ手に取ってみてください。

(運営委員 上垣喜寛)

本の詳細は下記のQRコードより

